

介護等体験からの「学び」

ーディスカッションによる学び合いー

荻野 佳代子

はじめに

介護等体験は1998年度入学者より実施されているが、本学では2005年度より事前・事後学習を半期の授業として行っている。授業には、事前学習として体験の心構えや高齢者・障がい児の理解、施設・学校教職員の方からの講義を含む高齢者施設や特別支援学校の理解に向けた内容などが盛り込まれている。また、事後指導としては、履修者同士で体験を語り合い振り返る機会などを設けている。

入江(2008)は、体験を語ることなどにより、体験を振り返り意味づけることの重要性を指摘している。そして体験を通じた学びとして以下の3点を挙げている。

- ① 障がい者や高齢者に対する気持ちやイメージの変化
- ② 「コミュニケーション」の大切さへの気づき
- ③ 感謝される喜びと自分の有用感

同年代の均質な世界での体験が中心となる学生生活において、介護等体験は想像力とコミュニケーション力を問われる体験となり、それは介護等体験の大きな意義と言える。さらに荻野(2016)は事後学習としての振り返りレポートを分析し、履修学生の学びを以下の5点に整理した。

- ① 高齢者・障がい者と接する体験からの学び
- ② 人との接し方についての学び
- ③ スタッフ・教員からの学び

④ 人間としての成長

⑤ 教師としての資質向上

そしてこれらの基盤になっているのは、多様な人とかかわりのなかからコミュニケーションの重要性を「体験」として理解したことであり、その「実感」が自尊感情を高めることにつながると考えられる。

学びの効果は事前事後指導の授業の中でもみとることができる。本学では、授業の履修は体験に必須としており、体験時期は学生それぞれで異なるものの社会福祉施設での体験を含む学期に履修することとしている。体験の前後では、授業内のディスカッションへの取り組み姿勢も変わってくることを実感している。学部学科が異なり普段は顔を合わせることもない学生同士であっても、共通の体験をもつことで話を深めていくことができるようになる。また、体験で出会う多様な人々と比べて同じ大学で同じく教職課程を履修する学生同士は均質性が高いように改めて感じるのかもしれない。同じ教職を目指す学生同士が、介護等体験のテーマから教師としての資質向上に向けた内容へと掘り下げた話し合いを行っている。

本稿は、学生同士のディスカッションに焦点をあて、ディスカッションからどのような学びがあったか、そして学びを深める上でディスカッションにどのような意義や役割があるかを検討することを目的とする。

ディスカッションではまず、学生たちは施設・学校教職員からの講義を中心に授業での学

びを確認し、感想を共有する。そのうえで体験を終了した学生が自分の体験の振り返りを語る。そして一部の体験日程をまだ終了していない学生は、体験した学生の語りを踏まえ、改めて体験に向けて目標や心構えを語る。最後に授業での学びを含めて、体験を教員になるうえでどのように活かすかを全員で話し合う。話し合い中グループのうちの一人が内容を記録し、また終了後は各自がディスカッションからの学びをまとめる。この記録から得られた学生たちの学びを以下に整理する。

1. 高齢者との関わり

本学が体験先としてお世話になっている社会福祉施設は、横浜市の地域ケアプラザである。地域ケアプラザは、地域における福祉・保健の拠点として設置されている横浜市独自の施設である。そこでの体験内容は施設により異なるが、デイケアへの参加をはじめ高齢者の方々とコミュニケーションをとることは体験の大切な柱となっている。利用者のなかには認知症の方も含まれるため、事前学習では認知症に関する基礎的な知識や、認知症の方とのコミュニケーションについて学んでいる。そのうえで体験に参加し、学んだこととして語られた内容には、以下の記述がみられている。

(1) 実際に「接する」ことの大切さ

「自分の体験も、他の人の体験談も共通していたのは『想像していたのと現実とは違う』ということだ。施設は思っていたより明るく楽しい雰囲気だった。知らないことがマイナスのイメージにつながるということがわかった」

高齢者や高齢者施設と接する経験のなさが理解の不足、ネガティブなイメージにつながってしまうことの気づきが見られている。

「頭で理解していても行動できなくては意味がないことがわかった」

「施設の空気や利用者の世界はそれぞれであり、それになじむまでは大変だった」

事前学習で知識を身に付けて体験に参加していても、実際に高齢者とコミュニケーションをとろうとするとまどうことは多い。知識も大切だが「体験する」ことの大切さ、意義が実感されていることがわかる。

(2) スムーズな会話のための工夫

「笑顔を絶やさず会話をすると相手にも喜んでもらえることがわかった」

「あいさつ、自己紹介は何回も行った。名札を見せたり、耳元で話すなどの工夫が必要だと思った」

「ニュース・新聞を見ておき、今日はどんな日かなど、話のネタを用意しておくことで話がかうまくできた」

「何度も同じ話を聞くこともあるが、相手の気持ちを考えながら聞くことが大切だとわかった」

「いやな気分になる話題があったときも上手に話題を変えるようにした」

「戦争体験の話を知ることがある。自分は社会科教師を希望しており、勉強という気持ちで聞いている」

さらに、「利用者の趣味や好きな話題（例えばプロ野球、サッカーなど）を知ってメモしておき、次の回には簡単に話題を用意していくと会話が弾んだ」という学生の話は他の学生も感心したエピソードである。

ディスカッションにおいて最も活発に議論されているのは、高齢者とのコミュニケーションにおける構えや具体的な工夫などである。こうしたエピソードは、講義やレポートなどには表れにくい具体的な経験知といえるが、その共有にディスカッションは効果的であることを改めて確認することができる。

(3) 「みなを楽しむ」ための工夫

ケアプラザの体験では、デイケアで実施するレクリエーションを学生が考え、実施することがある。「参加する高齢者の方みなが楽しめる内容を考えることは難しい」と感じる学生もいる。

相手に楽しんでもらうためには、まず相手の理解が必要となる。個々の興味関心や心身の状態を把握し、安全に配慮しつつ、一方集団としてのまとまりも視野にいれなくてはならない。また自分の得意なこと、特技を活かした内容を考えることが改めて自己理解の機会になる学生も多い。この経験は「生徒全員が理解できる授業をつくることにつながる」という気づきにもつながっている。

2. 特別支援学校の子どもたちとの関わり

社会福祉施設での体験のみを行う学生がいるため、全員が特別支援学校で体験を行うわけではない。そこで特別支援学校教職員による講義や、体験学生の話聞きディスカッションを行うことは特別支援学校での体験を行わない学生にとって大切な学びの機会となる。またこれまで、特別支援学校での体験がきっかけとなり特別支援教育の道に進む学生も少なからずおり、介護等体験の枠にとどまらない貴重な経験になっている。

「特別支援学校の子どもたちの障がいの程度は個人で大きく異なり、その子どもが何に困っていて何が必要なのかを常に考え、一人一人に合わせた授業や取り組みが行われていることがわかった」

「障がいが重い子には特に表情やしぐさをよく観察し、その子が伝えようとしていることを感じ取ることが大切という話を聞き、教師として生徒を理解する上で必要な力だと思った。生徒の小さな変化をとらえて今後の学習活動に活かしたり、非行・いじめ等の早期発見にもつながる力だと思う」

「聴覚に障がいがある子は、自分の口を見て会話をしようとするのでよりはっきり口を動かして話すように心がけた」

「視覚障がいのある子どもたちは、点字の読み書きや協力し合って運動会を行うなど、思っていたより自立しており、必要な部分をサポー

トすることが大切と感じた」

「ろう特別支援学校では、いすを引くときの音がノイズになるためそれを防ぐためにいすの足にテニスボールがついている。またチャイムがなると同時にランプが光るなどの配慮を知ることができた」

特別支援学校の体験からは、一人一人をより丁寧に理解し接していく姿勢に加えて、その子どもに必要な支援や教育について考え、また環境的な配慮に対する気づきの機会になっていることがわかる。

「先生が児童から手話を教えてもらっている場面を見たという話を聞いて心が温かくなった」

教師が一方向的に教えるだけでなく教えられる姿を見ることにより、教育の相互性への気づきが得られたエピソードである。

3. 「コミュニケーション」への理解の深まり

「認知症の方と接するには聞くことが大切。思いやりや寛容の心をもって接することが必要だと思った」

「自分から心を開き積極的に話しかけたり行動することが大切だとわかった」

「言葉も、自分の理解でなく、相手が理解しやすい言葉を選ばなくては伝わらないことを感じた」

「相手とコミュニケーションをとるには、自分のことを知ることが大切。自分の長所はコミュニケーションのネタになり、短所は行動するときには気を付けるべき点になる。」

現代教師養成研究会（2009）は、教師の仕事の基本は「人間理解とコミュニケーション能力」であり、介護等体験がその気づきにつながるとしている。入江（2008）も指摘するように、コミュニケーションへの理解の深まりは、教師に限らず社会人として人間としてこの体験が意味のあるものと学生たちにも実感されている。

4. 「ディスカッション」の意味

「同じ講義を受けていても、人によって違う意見や捉え方があることがわかった」

「ディスカッションにより新しい視点で講義資料を見直すことができた」

「自分はこれから社会福祉施設の体験に行くが、すでに体験に行った人の話を聞いて、不安が軽減された。授業で習ったとおりのこともそうでないこともあったが両方を含めてよい体験だったという話があり、自分も終了後にそう話せるようになりたい」

上記の記述からは、ディスカッションによる振り返りは講義内容を改めて確認するだけでなく、内容をより多面的にとらえ直す機会になっていることが示されている。また、ディスカッションでのやりとりは、レポートに記述するより具体的な経験知に基づく内容が多く、とくに知識・定説通りでない経験を伝え合うことが理解の共有を助けるものと思われる。

考察

以上、ディスカッションによる介護等体験振り返りの学びについて整理してきた。

福伊 (2018) は、介護等体験における体験と学びの構造について、3次元モデルを提案している。まず第1次元「学びの領域」として介護等体験特例法が示す介護等体験の目的を踏まえ7つの基準からなる3点を挙げている。

① 人間観の構築

基準1：人間一人ひとりの存在、あり方、およびその多様性を理解し、尊重できる

② 社会連帯への気づきと職業観の構築

基準5：インクルーシブ教育や、そのリソースについて理解している

基準6：共生社会という社会のあり方について理解している

③ 支援するものとしての自己構築

基準2：カウンセリングマインドをもつ

て人と関わることができる

基準3：子どもたちの多様な教育的ニーズについて理解することができる

基準4：多様なニーズに対して適切な支援を考えることができる

基準7：子どもたちがそれぞれを尊重しあい、生かすあえるように工夫できる

第2次元では「体験の内容」を、①事前学習による構えづくりや講話、疑似体験、②見学・観察・環境整備等の業務補助、③交流（話し相手・散歩の付き添い等）、④介護・介助の4段階のレベルに分類している。

さらに第3次元では「支援資質の深まり」として、①様々な人と出会う、②人への感受性を磨く、③その場その人にふさわしいコンテクストに根差した支援を試みるといった段階を経ることを示している。

今回整理された学びをモデルにあてはめると、第1次元：「学びの領域」においては、3つの領域のうち③支援する者としての自己構築に関わる記述が多い。とくに基準2, 3, 4にあるような、個性、多様性への理解およびそれを踏まえた支援についての学びがディスカッションにより深められていると考えられる。また、第2次元：「体験の内容」は、4段階のうち3段階すなわち事前学習、業務補助、交流までが主であり、介護・介助を直接行うことは多くはない。しかし、第3次元：「支援資質の深まり」においては、①出会い、②感受性、③コンテクストに根ざした支援へと、支援資質が深まっていることが読み取れる。

すなわち、今回の整理を福伊 (2018) のモデルにあてはめると、体験内容としては実際の介護を行うなどの体験レベルは深くなくとも、ディスカッションを含めた振り返りを丁寧に行うことにより、特に支援者としての自己構築において支援資質を深化させる可能性が示唆されている。教員の資質の基本となる人間理解やコミュニケーション能力の育成において、介護等体験および事後指導におけるディスカッション

による振り返りの意義は大きいと考えられる。一般化には慎重にならなくてはいけないが、今回の知見を今後さらに確認をするとともに、今回あまり触れられなかった、モデルのうち①人間観の構築や②社会連帯への気づきと職業観の構築についての学びについても検討することを課題としたい。

【文献】

- 福伊智 (2018) 教員養成カリキュラムにおける体験を通しての学びⅡ－「介護等体験」における体験の省察をめぐって－ 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 4, 150-158.
- 現代教師養成研究会 (2009) 教師をめざす人の介護等体験ハンドブック 三訂版 大修館書店
- 入江直子 (2008) 介護等体験の意義と課題－「神奈川大学方式」で取り組んでみて－神奈川大学心理・教育研究論集 27, 93-101.
- 荻野佳代子 (2016) 介護等体験からの「学び」 神奈川大学心理・教育研究論集 39, 103-108.